2014・1号

直江の津

◉上越なおえつ信金倶楽部◉

34号
2014・6-2014・11

◉特集◉

越後国府・越後守護所・春日山城・福島城・高田城へ至る道

「高田開府400年」の意味 その2

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

私の「直江津探し物語」

●人工メタンハイドレート
—中学生がメタンハイドレートを作った—

●大火のまち直江津の歴史遺産【座敷蔵】を考える

歴史は「今日」への手紙

◉八坂神社を巡る

私の「直江津探し物語」

森田君夫

直江津は、旅立ちの町であった。十八の春、信越本線で直江津へ。北陸本線に乗り換え大阪に向かう。汽笛は故郷への別れの合図、この土地には戻らない覚悟の旅立ちであった。出発の記憶は、雪残る田んぼの向こうに南葉山。北陸本線からは南葉山は見えない。脇野田駅から見た南葉山が、時と共に北陸本線の車窓となったのだろう。

三角屋根の待合室は、ストーブを囲み皆が向かい合って座る。語らずとも汽車待ち共同体である。富山あたりから濃口醤油の色に変わる「駅そば」の匂い。うどんではないのだ。

小学四年生の夏、直江津の花火を見に行った。一家六人が一台の車に乗り合って出かけた。車は労災病院のあたりに停め、歩いて関川沿いを河口に向かうのだが、大きな踏切を渡らなければならない。近所の単線ではない広い踏切。渡り切った両親と兄妹、私は遅れて付いてくる祖母を見ながら渡り切った。その瞬間警報音が鳴りだす。ほぼ中ほどにいた祖母は一瞬ビクリとして引き返した。轟音を響かせ通過する列車。シルエットの堤防の桜。祖母を待ったかどうかも花火も記憶にない。六人で車に乗った最初で最後の日であった。

直江津・高田が合併した昭和四六年、私が中二の年に上越市は誕生したが、しばらく直江津は隣町のままだった。高三の夏に文化祭のためだけに参加したバンド。メンバーは直江津出身者ばかり、練習場所はおのずと直江津になる。その場所は、閉店したスナック。気兼ねなく音が出せる場所をメンバーが探した。その元スナックは、直江津駅から降りてしばらく歩いた海の近くにあった。おかしな二段の道を見て左に折れ、急な坂を上り共同井戸を右に見てゆっくり下った少し先にあった。客が来なくなってずいぶん時間がたったすすけた店内は記憶に薄い。鮮明に覚えているのは、急な坂を上ってすぐの斜めの道の風景。朝顔が一メートルほど這い上がった玄関先には、風呂上がりなのか、ステテコとランニング姿の初老の男性が縁台将棋をしていた。相手はいない。背中一つだ。細身の足を片方縁台に上げ、ゆっくりと駒を動かす。暮れかかる坂道のランニングとステテコがひときわ白く輝いていた。

結納に訪れた妻の両親の宿は「いかや旅館」を予約した。高田の旅館の方が便利そうだが、父か私が「じょこばった」のかもしれない。理由は覚えていない。時を重ねた建物は味わい深く、一時（いっとき）でも客として接しられて良かった。

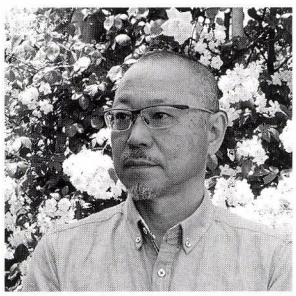
「なんぼいさん」の一行は、七月二三日に妙高山に登る。我が家の真北は白装束の人たちが立ち寄る「拝所」である。それは夏休みの始まる頃の風景であり、当り前に受け入れて来た神事でもある。数日すると聞こえて来るのは神輿の掛け声である「ワッショイ・ワッショイ」大通りまで飛び出して探して見るが、神輿は見えず「掛け声」は遠ざかって行く。祇園の「神輿」は、南本町一丁目の雁木の所でユーターンして行くのだ。「音」だけの祭り……。

縁あって直江津の「まちあるき」の会に参加するようになった。駅前の雰囲気は随分変わったが、案内を聞きながら巡った「二段の道」は昔そのままだった。用もないのに、間に付けられた階段を上り下りしてみる、誠に楽しい。

直江津のまちは迷路。南北の通りは家々が表札を向い合せているのだが、家の面積に対して道の数も多く、道全体の面積がやけに広い。しかし、何といっても特徴は、小路（しょうじ）と呼ばれる東西の通りだ。人がすれ違えるくらいの幅で、ご近所の便利通路。この通りがないと、回覧板はいいが、買い物やお茶呑みに行くのに時間がかかりすぎる。洗濯物や干物が揺れる小路は住む人の心も繋いでいるのだ。

城下が高田に移動して四百年。碁盤の目の町並みは京都の習い、高田は計画都市であるのに対して直江津は、その地形に合わせて人々が寄り合ったのだろう。

小路を歩いてみよう、時には見上げてみよう。そこには高田にはない道幅と同じ「空」がある。



もりたきみおさん

エフエム上越㈱放送課長／大阪芸術大学映像計画学科卒業／報道カメラマンとして主にニュース取材にあたる／フリーランスの後、平成元年上越ケーブルビジョン入社／平成十一年エフエム上越開局により現職。

FMJの人気番組「すまいるカフェ」を毎週火～金曜担当。水曜日の「町づくりHODAN」では、地域のまちづくり団体を紹介している。

七月二六日の夜、荒川橋畔の櫓の上で、神輿の川下りを実況しているのが森田さん。

人工メタンハイドレート

中学生がメタンハイドレートを作った

「燃える氷」と呼ばれ石油の代替エネルギーとして期待されるメタンハイドレートが、資源エネルギー庁の調査で、上越沖の海底に有望な層の存在が確認されて注目されています。

このメタンハイドレートを上越教育大学附属中学校濁川朋也教諭が「持続可能な発展のための教育」というテーマで教材に採りあげています。本紙では東京大学で行われたシンポジウムでの濁川先生の報告を基に編集部で再構成して、メタンハイドレートとはどのようなものなのかを考えてみます。

（産業技術総合研究所）からお借りしている。

メタンハイドレートの作り方授業構想については、岡屋克則先生（東京大学）、定木淳先生（故）（東京大学）、福島朋彦先生（東京大学）からご指導を受けている。

持続可能な発展のための教育

～メタンハイドレートを教材に～

はじめに

平成二四年度から新しい学習指導要領が完全実施され、そのなかに「持続可能な社会を創ることが重要であることを認識すること」と述べられています。これは社会科においても述べられています。

それでは「持続不可能な世の中」になってきているのかということになりますが、背景には地球規模の人口増加、食糧不足、エネルギー不足、環境破壊、政治や経済のグローバル化、国際的な競争の激化による国家や地域間・個人間の格差や貧困、市街地の空洞化、山間地の過疎化、少子高齢化など多く課題があります。

注 メタンハイドレートに関する資料について

単元構想等については、二〇一一年次の段階でのデータに基づいており、今現在の詳細とは異なる可能性がある。

また、メタンハイドレートに関する様々な試算については、多くの学者の見解や予測の上にあるため、決定的なものはない。ここで扱っている採掘量等については、様々な数値を基にして、概ね平均値を取った値として、生徒に提示している。

写真や資料の一部は、松本良先生（明治大学・元東京大学）、増田昌敬先生（東京大学）、駒井武



東大で行われたシンポジウムで
報告する濁川先生

このようなことから、持続可能な発展のための教育、Education for Sustainable Development（ＥＳＤ）の必要性が言われています。

ＥＳＤのとらえ方も様々ですが、当校ではユネスコスクールが提唱しているＥＳＤの基本的な考え方に基づいています。

ＥＳＤの基本的な考え方には、エネルギー教育、環境教育、国際理解教育、世界遺産や地域の文化財等に関する教育、その他関連する教育という五つの教育のアプローチがあります。

では、理科教育でそれを担うことが比較的容易なものと言えば、エネルギー教育と環境教育ということになります。

エネルギーを得ようとすると、環境へ負荷がかかります。かといって、エネルギーを得なければ私たちの現在の生活を支えることはできません。

生活を支えるエネルギー開発と環境保全の両方に目を向けて考えていくというのは、相反することを「同時的」に解決するということにもなります。

これらの問題を「調和的に解決が図れる社会の実現を目指し、総合的なものの見方ができる」生徒を育成していく場が必要となります。

エネルギー資源の現状は

そこで、エネルギー開発と環境問題について、先ず考えてみることにしました。

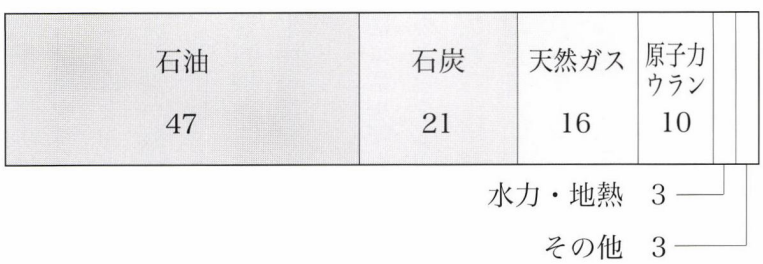
まず、エネルギー資源事情を見てみます。現在の石油依存社会のなかで、今のようなペースで使用し続けた場合、将来どのようなことが予測されるでしょうか。石油を含めたエネルギー資源を見ると、採掘可能年数は次のようになります。（カッコ内依存率）

石　油（四七％）　四〇年
石　炭（二一％）　一六四年
天然ガス（一六％）　六七年
ウラン（一〇％）　八五年

右のような石油の代替エネルギー資源には、次のような問題点が考えられます。

石　炭…石油よりCO_2の排出量が多い。
　大気汚染の原因となる物質を多く含む。
　代替してもいずれなくなる。
天然ガス…液化輸送のコストが莫大。
　代替してもいずれなくなる。

日本で使用されているエネルギー資源の割合



石油以外の代替エネルギーについて、その長所・短所から予想される結果を導き出しました。

日本の産業のほとんどが石油に依存している。枯渇したら経済活動が機能しなくなるのではないか。

ガソリン、トイレットペーパー、衣類をはじめあらゆるものが石油から作られているので、生活は困難となる。生活を営む物資を巡って、国際摩擦が生じると思う。

今後さらにエネルギー需要が高まることが予想される。石炭のさらなる使用が懸念されるが、環境問題を視野に入れるとコストはかかっても、風力、地熱、太陽光に変えていく必要があるのではないか。

しかし、自然エネルギーの風力・地熱・太陽光にも、先に見たような問題点が残ります。そこで上越沖の海底での確認されているメタンハイドレートに注目してみることにしました。

「燃える氷」メタンハイドレートとは

石油の代替エネルギー資源として注目されるメタンハイドレートとはどのような物質なのでしょうか。

メタンを氷の格子状結晶が包み込んでいるもの。

日本周辺の近海に現在の年間使用量で一〇〇年分以上あると言われている。

自然エネルギー型社会に移行するまでの、つなぎのエネルギー資源として有望。

それでは、メタンハイドレートは資源として有効なのでしょうか。まず、資源として開発可能な有用物質の条件を見てみましょう。

1属鉱物資源では品位が高く、石油・天然ガスなどの炭化水素では、含有層の空隙（くうげき）中の充填率が高いこと。

ウラン…放射性廃棄物処理の問題。

代替してもいずれなくなる。

それでは、自然エネルギーはどうでしょうか。

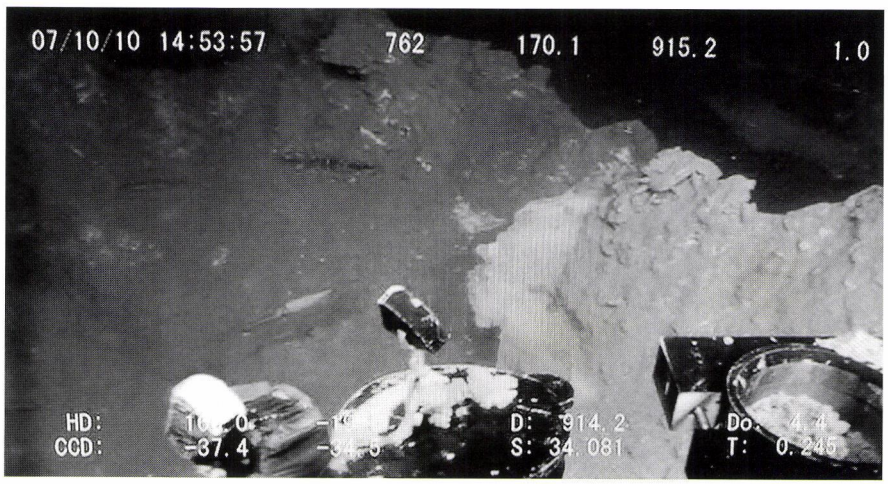
水　力…ダム建設による環境破壊。

風　力…装置の寿命が一〇数年と短く、建設コストがかかる。

波　力…安定した電力が得られない。

地　熱…温泉資源の枯渇、毒性物質の流出が懸念される。

太陽光…昼間しか発電できない、天候に左右される。



海底のメタンハイドレート

生徒に見せた海底にあるメタンハイドレートの映像。色の白いものがメタンハイドレート。海底からメタンが放出された後に，ハイドレート化して岩床などに付着している物もあるようだ。（映像提供・東京大学松本良教授）

2高い含有率であっても、多量になければ開発対象になりえない。対象物を含んでいる地層の「面積×厚さ」が大きい必要がある。

3経済的に有利な場所に存在する必要がある。

・陸上資源の場合

標高が低く、最寄りの港、消費地までの距離が短いこと。

・海洋資源の場合

水深、製錬、精製施設へのアクセスが鍵になる。

4開発にかける費用以上の利益が見込めること。

右の条件を踏まえて、メタンハイドレートの長所を見てみましょう。

一年で日本が消費するエネルギー資源の一〇〇年分ある。

CO_2の排出量が石油・石炭より少ない。

メタンガス燃焼後に発生する二酸化炭素量が少ない。

メタンガス燃焼後に発生する有害物質がない。

燃焼による窒素化合物を出さない。

石油より熱効率が高い。

液化天然ガス（ＬＮＧ）は、液体窒素での冷却輸送が必要であるが、メタンハイドレートは一気圧マイナス八〇℃で輸送可能。または、氷の被膜形成でマイナス二〇℃でも可能になる。これは輸送コスト大幅削減につながる。

日本周辺の海底に大量に存在し資源として有望である。新潟県では、佐渡、上越近海に多く存在する。

分解で発生した水を生活や産業で利用できる可能性がある。

短所も見てみましょう。

再生可能なエネルギーではない。

採掘コストがかかる。

メタンガスそのものが、二酸化炭素の二一倍の温室効果をもつ。

海底では、砂層の間隙に細かく点在するため、採掘が難しい。

採掘により、海底の大規模崩落を招く危険性がある（津波の原因になる）。

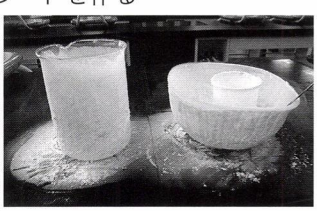
分解生成水を放出した場合の海洋生態系への影響が懸念される。

生物の大量絶滅（温暖化）が懸念される。

低温高圧条件での保存が必要である。

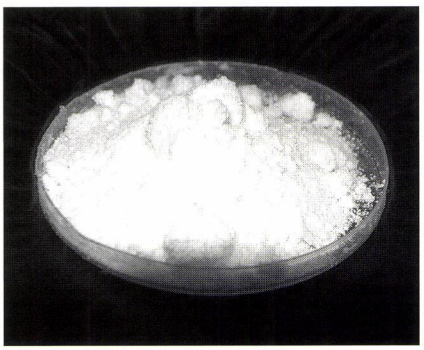
授業用に人工メタンハイドレートを作る





容器に微細氷を入れる
↓
1.25MPa をかけて
1 度捨てる
↓
8 MPa（80 気圧）
…水深 790m 相当
↓
（2 日間冷凍庫）
↓
6MPa（60 気圧）
…水深 592m 相当
（完成！）

15MPa（150 気圧）メタンガス


完成したメタンハイドレート

メタンハイドレートについて生徒たちが考えたこと

メタンハイドレートについて考えてきましたが、実際にはどんなものなのでしょうか。海底から採取することはできません。東京大学海洋アライアンスの福島先生にお願いしてメタンハイドレートを提供して頂きました。しかし輸送には危険が伴い、また実験を続けるには量が少なすぎます。それではということで、実際に作ってみることになりました。前ページの写真のような方法で作成に成功しました。

このメタンハイドレートを使って様々な実験を行い、掘削から発電までの技術開発の提案を行いました。

ある生徒は、地熱を利用して海底にあるメタンハイドレートを海底で分解して取り出し、さらにソーラー発電のエネルギーで減圧させてハイドレートにならないようにしてメタンガスを集める方法を考えました。

実験を通して生徒たちが考えたこと

エネルギー問題に対して意識して生活してきたわけではないが、今回の授業を通して、私たちの生活について改善を図る必要性を感じてきた。

今まで目にしたことのない物質を実際に作成したり、燃やしたりすることで、身近なもの、身近なこととして実感が沸いた。

メタンハイドレートを実用化するためのハードルは高いといえるが、過去の石油開発の時と同様に実現できる日が必ずくると議論を通して確信した。また、技術開発することの喜びや楽しさを味わうことができた。自分たちの未来を何とか切り拓きたい。

自分たちが住む上越市の沖合に、未来の鍵を握る物質があることを知って驚いた。二億五千万年前の生物の大量絶滅に関係する物質であるだけに、触れてはならない領域に人類は首を突っ込むのではないかと正直心配であった。

持続可能な未来を築くためには、メタンハイドレートは石油の代替エネルギーとして考えていくよりも、太陽光や風力、地熱といった自然エネルギーに移行していくまでの繋ぎと考えたほうが、人類の未来にとって明るいものになるのではないかと考える。

おわりに

このメタンハイドレートの実践において、生徒は持続可能な未来に向けて真剣に悩み、調和的な解決の必要性を実感しながら課題に取り組みました。視野を広げ総合的なものの見方ができる生徒を一人でも多く育成したいと思います。

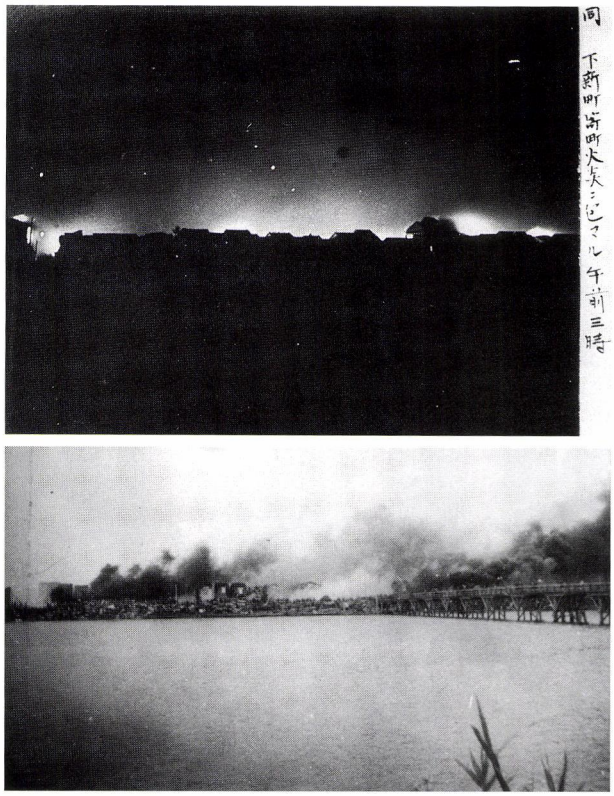
大火のまち直江津の歴史遺産

【座敷蔵】を考える

新潟大学工学部黒野弘靖准教授「上越市直江津地区歴史的建造物現況調査」に拠る

直江津の「座敷蔵」

「一生に三度火事にあって直江津人」、「直江津と木端は、たてれば燃える」火事と言えば「あっ、直江津か」と悪口を言われるほど、歴史的に直江津は大火が多かった。明治以降も火災保険料率が全国一高いと言われたほどである。



明治39年7月　1041戸を焼失する大火

上　出火から2時間後、午前3時　古城川から撮影
下　午前6時、永代橋が見える

昭和二二年から、時の町長、商工会議所会頭、県議、町議、町内会、婦人会、もちろん消防署も含めた全町あげての無火災運動を展開し、その努力の結果、一五年間にわたってほとんど無火災を維持するに至り、直江津市防火委員会が活動の足跡を『無火災運動十五年の歩み』として出版している。

さて、その火事の多い直江津地区で、江戸時代「今町」と呼ばれた地域に、直江津独特と言われている「座敷蔵」を持つ家が多く存在する。

この「座敷蔵」は、火災から家を守る自衛策として建築されたもので、店・茶の間・土蔵（座敷蔵）と並び、一軒の家の中に取り込まれているため、概観は単なる普通の家のように見えるが、被災してはじめて土蔵の存在が分かる。日頃は土蔵の中は仏壇程度で、火災時に家財を入れて土戸を閉め、鎮火後、復興までの仮住まいとしていた。

土蔵が家のまんなかにあり、その前が土間ではなく座敷になっているため、店から土間の通路（通り庭）が続き、奥には台所や手洗い風呂などがあるため、いちいち履物を履いて移動しなければならないので大変不便を強

いられるものであった。そのために、下水道工事などの機会に撤去されたものが多いと言われている。

昭和五九年に刊行された新潟県社会科教育研究会編『郷土新潟県の生活風土』の〈直江津における「座敷蔵」〉（長野克水）でも、

蔵とは「貨物・商品・家財などを火災・水湿・盗難などから安全に保管・貯蔵する目的で造られた建物」である。ところが直江津の土蔵は、家の構えの小さな家もあったり、蔵の中に現在はもとより、かつても仏壇以外に他の家財を収納した形跡はなさであったりする。更に「ざしくぎら」と呼ばれる住まいする蔵がかなり分布するなど、特異な形態を示している。土蔵があるため、間取が制限され、今の暮らしには無用の長物化し、取り壊されたり、壁をぶちぬかれたりしていた。それが関川改修に伴う移転で、かなりの数が消滅している。

と、その特異な形態の成立を報告している。

以降、ほとんど調査が行われていなかったが、新潟大学工学部黒野弘靖准教授が上越市文化振興課の協力を得て、平成二三年から三年間にわたって「上越市直江津地区歴史的建造物現況調査」を行っている。

このほど、直江津歴史遺産講演会「直江津の座敷蔵とまちづくりの可能性」（ライオン像の建物をまちづくりに活かす会主催）として、「座敷蔵」の調査報告が黒野准教授によって行われた。

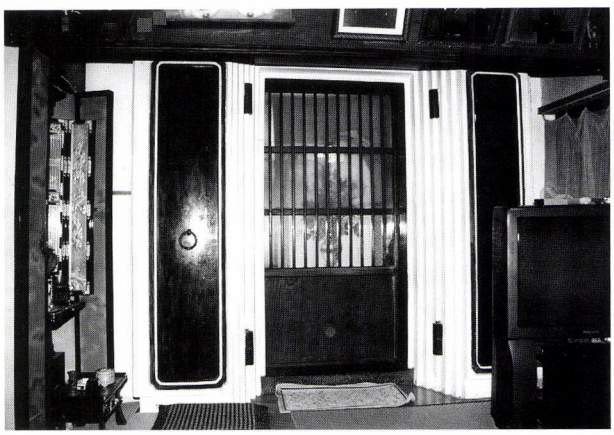
当日の講演資料から実測図の一部を先生の許可を得て、掲載できることになった。

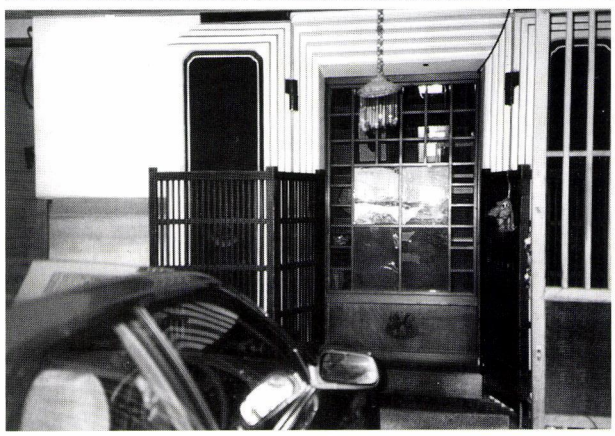
■調査内容

・期間　二〇一一～二〇一三年

・対象　中央三・四丁目

雁木のある家七五二軒　住宅一六軒







上　蔵の前が茶の間になっている
中　蔵の前の部屋を車庫に改築
下　茶の間の吹き抜け
前二階と裏二階の渡り廊下が見える

・クラを持つ住宅　現有二八軒　以前所有二八軒
・建築年　一一棟で確認　明治四（一八七一）年から大正九（一九二〇）年

黒野先生は、あくまでも調査の段階であり、直江津の「座敷蔵」を定義づけるものではないと前置して、次のような特徴を上げている。

呼称は「ソトクラ」と「ウチクラ」で、「くらざしき」という呼称は確認できなかった。（編集部注・ウチクラが「くらざしき」をさす）

＊チャノマに隣接するウチクラには扉上部に神棚がある

＊アマヤで覆われたトマエ（の部屋）と雁木町家のチャノマとの一体化。

＊一・二階とも一室になっている。

＊トマエ（の部屋）が格調高い空間になっている。

＊調査時点では仏壇配置は確認できていない。

＊明治期

敷地間口が広く前庭を持つ住宅で、奥に建つウチクラの前面に平屋のチャノマ。

チャノマに並列するウチクラ。

雁木町家の裏庭に建てられたソトクラ。

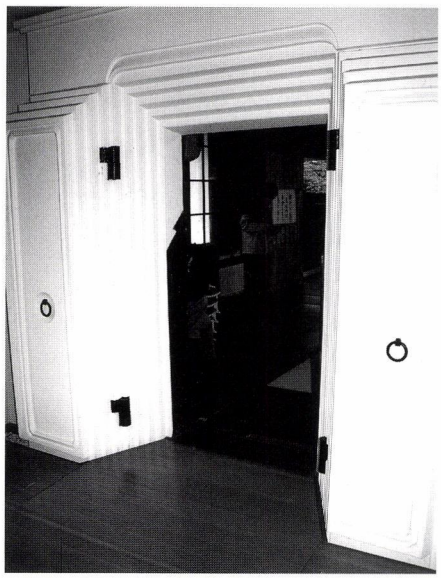
＊大正期

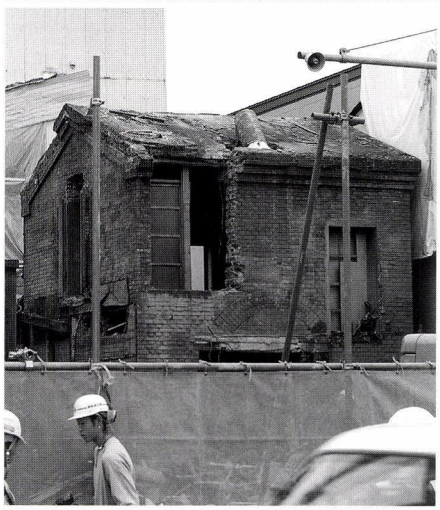
マエニカイの成立で雁木町家のチャノマと隣接したウチクラ。

雁木町家のトオリニワの脇に建てられたソトクラ。

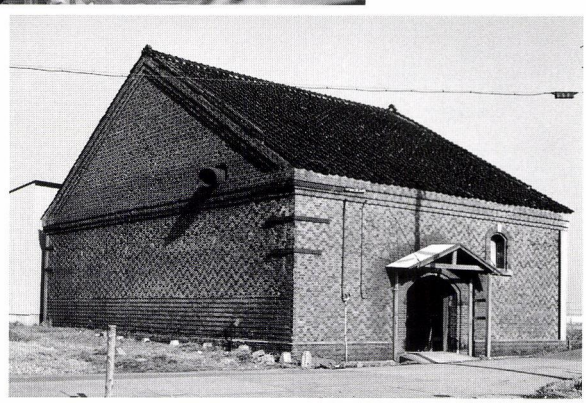
次に掲載する実測図を見て、いわゆる「直江津の座敷蔵」をイメージできるものが少ないことと、その家、その家の家業や住み暮らす形に合せた工夫が凝らされていることに興味を惹かれる。

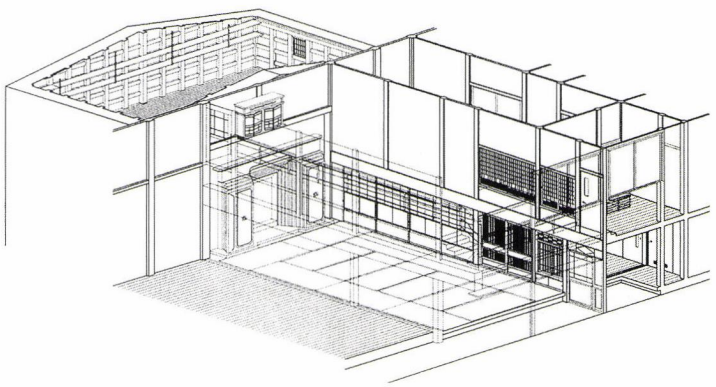
注　次ページ以下に掲載する図版の説明は、黒野先生から提供を受けた図に編集部の責任において作成したものである。

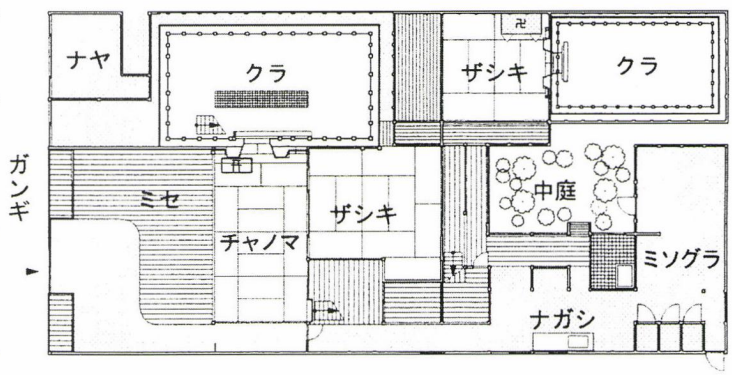




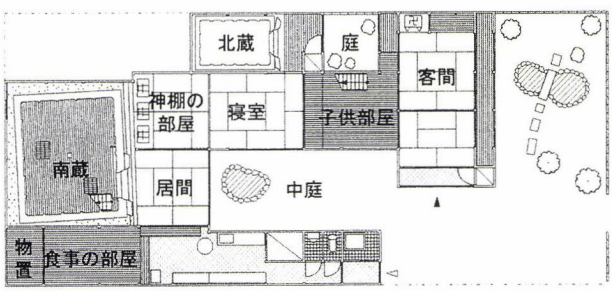
上　土蔵造りの寺の入り口
中・下　土蔵だけではなく煉瓦の蔵も多く見られた

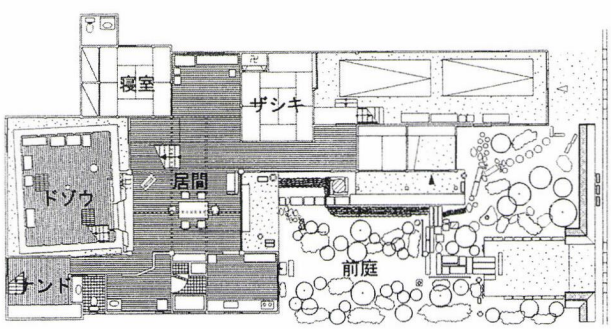




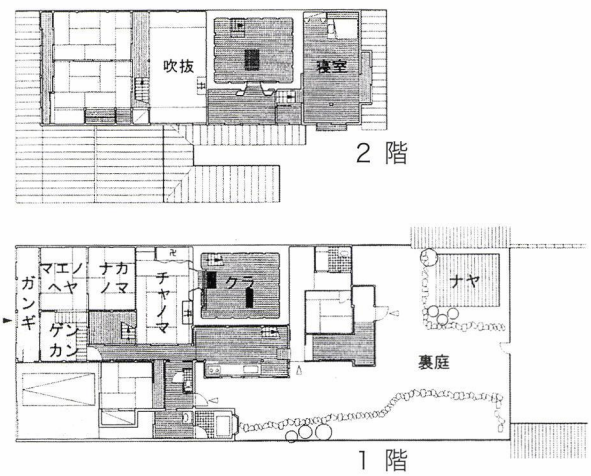


明治期の建物
茶の間から店に向かって右手にクラがある。
今もほとんど変更はない。

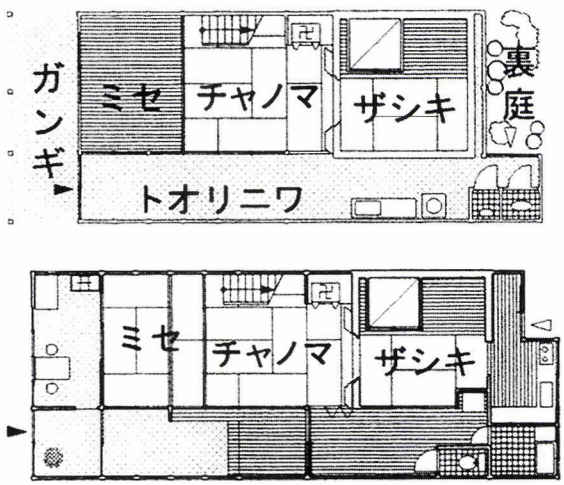




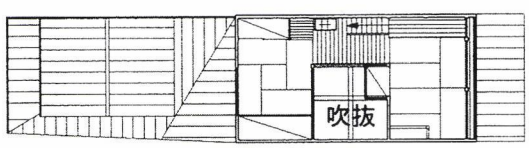
明治期の建物
通りから庭を通って入る。蔵は南蔵と北蔵がある。
現在は南蔵を生かして、新しい生活空間に変更されている。

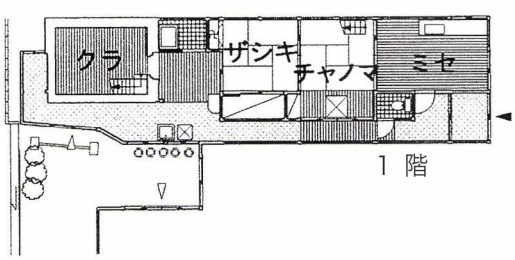


大正期の建物
当初はクラの前は中庭になっていたが、蔵の前に茶の間ができる。

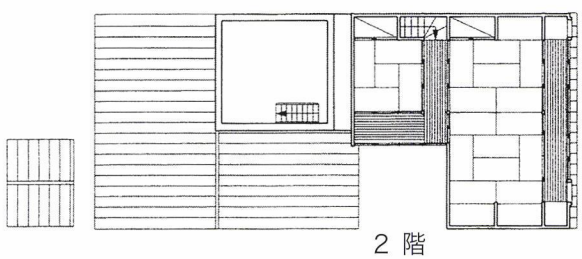


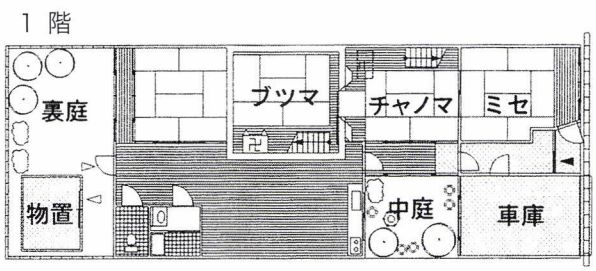
明治中期以降の建物
「ザシキ」と表記されている部分が土蔵。
昭和 35 年ころまで下図のように土蔵の入口は茶の間のみだったが、裏にも出入り口が出来、土間は板敷の廊下になった。



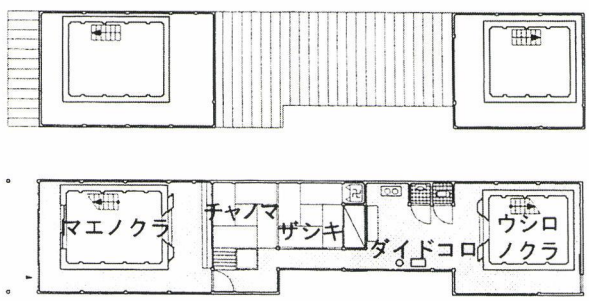


大正初めの建物
クラの前は、もとは土間になっていた。茶の間は吹き抜けで前二階と裏二階の渡り廊下がある。

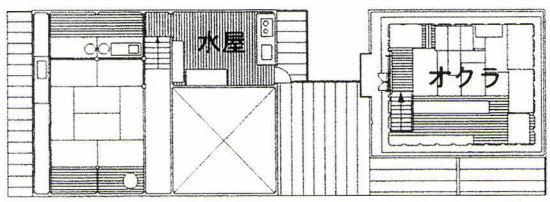




明治中期以降の建物
茶の間の次の土蔵が「ブツマ」と呼ばれている。
茶の間は吹き抜けになっている。

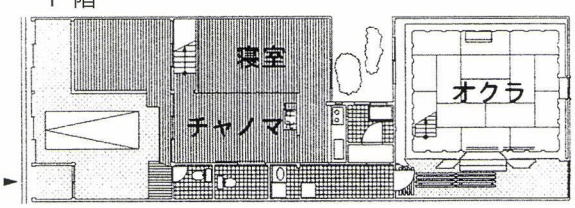


明治初期の建物
前の蔵と後の蔵の間に生活空間がある。
昭和・平成と改造され、現在は土蔵はない。



2 階

1 階

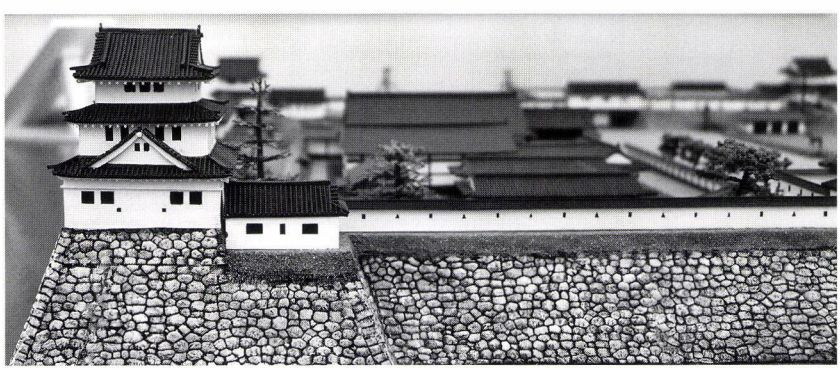


大正初めの建物
独立した外蔵の構造になっている。
茶の間は吹き抜け。

福島城ジオラマ

自分たちの住むまちにあった「福島城」を見直し、地域愛と結束深めようと結成した「福島城を愛する会」の皆さんが、発掘の成果などを踏まえ独自の視点から、復元ジオラマを作成した。（上越市地域活動支援事業の採択を受けた費用で作成）





古城小学校校庭の
福島城址の碑



特集

越後国府・越後守護所・
春日山城・福島城・高田城へ至る道

「高田開府400年」の意味 その2

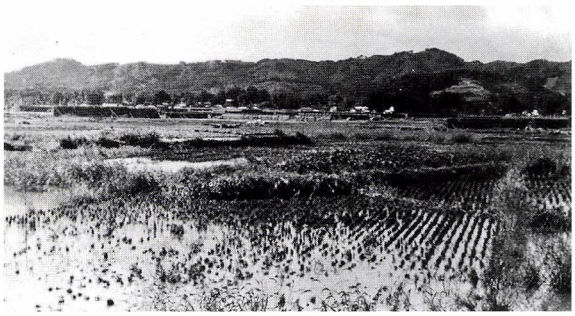
小島幸雄

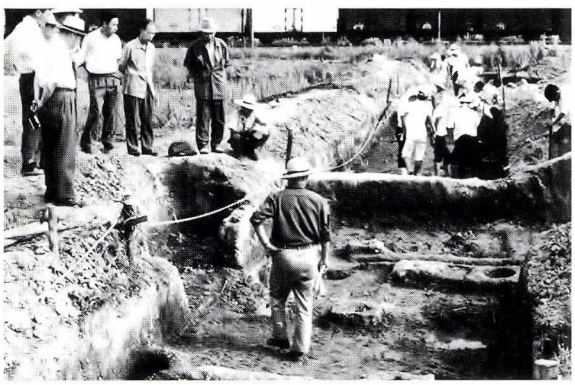
御館発掘から五〇年

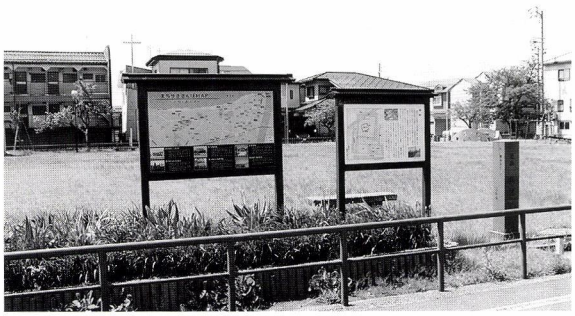
今年は、「高田開府四〇〇年」の年にあたりさまざまな行事が計画され、すでに実施されているものもある。ところで、記念の年といえば今年は「御館」の発掘調査からもちょうど五〇年の節目の年なのである。

昭和三九年（一九六四）、五智の地で区画整理が実施されることになり、その区域に含まれた「御館」の発掘調査が実施された。東京オリンピックに沸いた年で、「東洋の魔女」という言葉も懐かしい。今年はサッカーのワールドカップの年であり、「サムライジャパン」の選手たちの活躍に期待を寄せる人も多いだろう。

東海道新幹線開業の年で、名神高速道路など、どちらかというと文化財というよりインフラの整備にまい進していた行政にあって、当時の直江津市が主導して新潟大学や新潟県教育委員会と共に学術調査を行った意義はと







上　手前の田んぼの先の一段高い所が御館跡
　　御館と春日山（写真左端）とは指呼の間にある
中　御館の発掘
　　写真上部に貨物列車が見える
下　御館公園
　　公園として保存されている



春日山の毘沙門堂
左の白い石柱は「不識院阯」の碑

ても大きいのである。

「御館」の発掘調査は一過性のものにとどまらず、「福島城」の三カ年に及ぶ学術調査に継続されていった。「福島城」の経過は後で述べることとして、今回は「高田開府」の意味をまず「御館の乱」から紐解く事にしよう。

御館の乱

天正六年（一五七八）謙信が死去し、二人の養子景勝と景虎が跡目を争うことになる。「御館の乱」である。乱は景勝が勝利して収束するのであるが、乱が起こった際に景勝が「春日山城」を占拠し、景虎は「御館」にあって足掛け二年の戦が繰り広げられたのである。「御館の乱」の名は、敗者である景虎の拠点が「御館」であったことによる後世の命名であろう。

景勝が「春日山城」に拠点を構えたことの意味は、景虎が「御館」を本拠としたのは何故か、この点を整理してみよう。

「春日山城」は謙信が死去した際葬儀が執行され、そして遺骸が葬られた場所と考えられている。上杉家の正史『上杉家御年譜』では子細な場所の記載はないが、天正六年三月九日に脳卒中で倒れ、一三日に死去し、一五日に葬儀が執行されたことを伝えている。同書では、葬儀が春日山北の丸大乗寺長海が導師を務め、謙信の遺言によって甲冑を着て甕の内に納められて、不識院に葬られたとも記す。不識院は、明確な位置を知るすべはないが、春日山城の本丸から毘沙門堂までのどこかと考えられていて、御花畑と称する直江屋敷の上方の遺構は謙信の墓所に備える花を栽培した可能性もある。

「御館」の意味については前号に記したので参照していただくこととして、ここでは謙信の政庁であった可能性が高いことを述べるにとどめる。

このように見てくると、景勝が「春日山城」を占拠した理由は「謙信の墓」を手中にすることであり、正式な継承者として墓を守っていくという姿を内外に示したものであろう。では、景虎が要塞である城郭（山城）ではなく、堀と土塁だけの「御館」にこもった理由は何だったのだろうか。これがまさに謙信の政庁である「御館」を本拠とし、さらには謙信にその職を譲った前関東管領上杉憲政を擁して、関東管領上杉謙信の正当な継承者としてアピールすることだったと考えられる。

「乱」の後も使用されていた御館

乱は、歴史がすでに伝えてくれているように景勝の勝利で終結した。そして、「御館」は廃墟となり使用され

ることはなかったと考えられてきた。しかし、どうもそうではないらしいのだ。近年焼物の研究が飛躍的に進展し、細かな年代がわかるようになってきた。それによって、「御館」は乱によって焼亡したものの再度使用されて、少なくとも上杉氏の会津転封までその命の火が消えることは無かったようである。

それを推測できる遺品が米沢市の法音寺に残されている。位牌である。法音寺は上杉氏歴代の位牌をお守りする寺で、米沢市の上杉家廟所のすぐ前にある。謙信以来、景勝をはじめとする歴代の藩主の位牌と共に、関東管領上杉憲政のそれもまつられているのだ。憲政は、「御館の乱」で景虎側について「御館」にこもり、最後は景虎の子道満丸を伴って「春日山城」の景勝側との和議に向かう途中、四ツ屋の付城で殺害された武将である。景勝以来の上杉家としては「乱」で敵対した武将であるにもかかわらず、いつの頃からか、歴代藩主と一緒にまつられるようになった。このことはとりもなおさず、上杉家が関東管領の家柄であることを示す明確な意思表示に違いない。



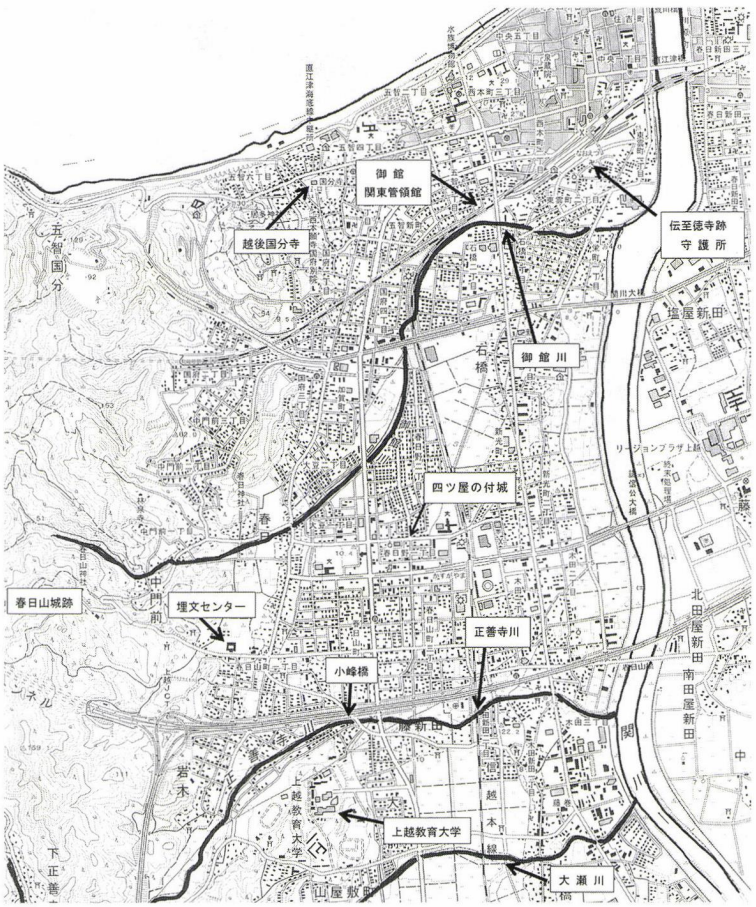
法音寺（米沢市）

守護所の転倒

ところで、謙信の力が台頭してから堀氏が景勝に替わって春日山城主になるまで、それまでの繁栄の極にあった「守護所」の権威が失墜していた形跡がある。平成四年から三年間発掘調査が行われた直江津駅とその周辺の伝至徳寺跡について、調査結果は前号で紹介したので割愛することとして、ここでは権威の失墜について述べよう。

「守護所」と考えられている場所から出土した陶磁器の詳細な分析によって、一六世紀半ばを中心とする数十年の遺物がほとんど出土しないことがわかっている。これが、謙信と景勝の時代に合致するのである。このことは、越後守護上杉家（謙信が相続した上杉家ではない）が最後の守護となった定実が死去し、定実に世継ぎが無かったために断絶した後使用されていないことを示していると考えられるのである。そして、守護所から出土しない時期の遺物が出土しているのが、守護所から少し西に位置する「御館」なのだ。

しかし、再び陶磁器が出土するようになる。それは、堀氏が景勝に替わって春日山城主になった時期とほぼ一致しているので、謙信・景勝の頃に衰退した守護館が堀氏によって再度使用されたと考えられるのである。言い換えれば、関東管領上杉氏は守護上杉氏の館を使用せず、独自の府中館を造営したと考えられる。謙信が関東管領に就任した永禄四年（一五六一）と国分寺を再興する永禄五年前後は守護所の転倒した時期とできよう。



正善寺・御館川・大瀬川の流路が替えられたことが分かる

府中と春日山城

このように見てくると、越後府中は定実亡き後（それ以前からかもしれないが）明らかに府中と春日山城という、二つの機能によって成り立っていたことになる。謙信の頃はもちろん二カ所の機能を掌握していた、というよりも謙信によって造られたと言うべきであるかもしれないが、府中はその二カ所の政治権力の集合体であったと考えるべきであろう。

ここで整理しておきたい。冒頭で記した「御館の乱」で景勝と景虎が、それぞれ「春日山城」と「御館」に拠ったのは、府中権力の二極構造のどちらかを掌握したかったからに他ならないのである。他の山城や館では、跡目相続で正統を主張する意味を有しなかったのであろう。越後の中心都市の機能を支える「城」と「館」をそれぞれが獲得することで、謙信が築いた越後の国主たる地位を継承することを示す目的があったのであろう。これも、謙信が春日山城不識院に自らの墓所を定めたことがきっかけとなったことは否めない。「城」と「城主の墓」という謙信の国主の地位に対して、「御館」と「越後国分寺」という都市構造で対抗したのであろう。

これが、福島築城の意図を解く鍵になると思われるので、紙面を割いて「御館の乱」の意味を確認してきた。

正善寺川と御館川

ここで少し話題を変えよう。

春日山城を巻き込むように、城の西の沢から南を迂回して東に流れ、関川に合流する川がある。正善寺川だ。昭和五二年に上越教育大学の敷地を発掘調査した際、今のグラウンドの東側で段丘崖を確認した。今の正善寺川とは流路が違い、大学の校舎の西側で周辺より一段低く帯状の水田が見られたのだ。その時は、正善寺川の古い川跡だ、程度の印象だった。

ところが、昭和五七年に新潟県教育委員会が北陸自動車道の発掘調査を行った際、正善寺川の左岸、小峰橋の北側で縄文時代前期（約五〇〇〇年程前）の竪穴住居跡が発掘された。それも、洪積台地と呼ばれる古い地層の上に造られていて、上越教育大学から続く台地が標高を下げながら春日山町三丁目に向かって地下に存在していることが判明したのであった。

洪積台地は川によって削られることはあっても、川が

横断することはない。洪積台地が川によって削られると河岸段丘となり、ほくほく線に乗って信濃川を渡る時に見られるような川に向かって階段状の平地がつくられるのだ。

そうすると、小峰橋を挟んで南の教育大学の縄文遺跡と北側の縄文遺跡は同じ大地に住んでいた人の痕跡ということになり、分断されたのは人工的なものだということになる。

では、本来、というか古い正善寺川は何処を流れていたのだろう。

この答えを教えてくれたのは、北陸自動車道の建設前、設計時に撮影された航空写真だった。当時の道路公団が撮影した航空写真には、大学寄りではなく春日山寄りに流れていたことを示す川跡も写っていたのだ。それは、現在の埋蔵文化財センターの敷地を横断し、大豆のお寺の裏を斜めに進んで直江津方面に向かっていた。その行先は、現在の御館川に合流すると考えられた。

御館川は、正善寺川だったことになる。正善寺川は、ある時期に人が掘削して流路を変えたことになるのだ。

その「ある時期」を推理してみよう。

一つは、関東管領上杉憲政が謙信を頼って越後に逃れた天文二一年（一五五二）から謙信が関東管領となる永禄四年（一六五一）までの一〇年間、もう一つは景勝が御館の乱を制して実権を掌握した時期、三番目は堀氏が春日山城主となって以降の三時期が考えられそうである。

筆者は、御館の造営が謙信の関東管領就任と無縁でなく、府中の二極構造が謙信によって完成されたと考えているので、正善寺川の開削と流路変更は直江津に流れ込んでいた大量の水を関川に直接落とし、砂丘の後背湿地を乾燥化させることと関川の水量確保によって艀の航行を容易にする目的で行われたと考えたい。直江津に御館を中心とする府中機能の集約を目的に乾燥化を図ったと考えるのである。今は直江津から春日山まで絶えることなく家並みが続く。しかし、四百数十年前までは多くの湿地帯があったと考えられるのである。

福島築城

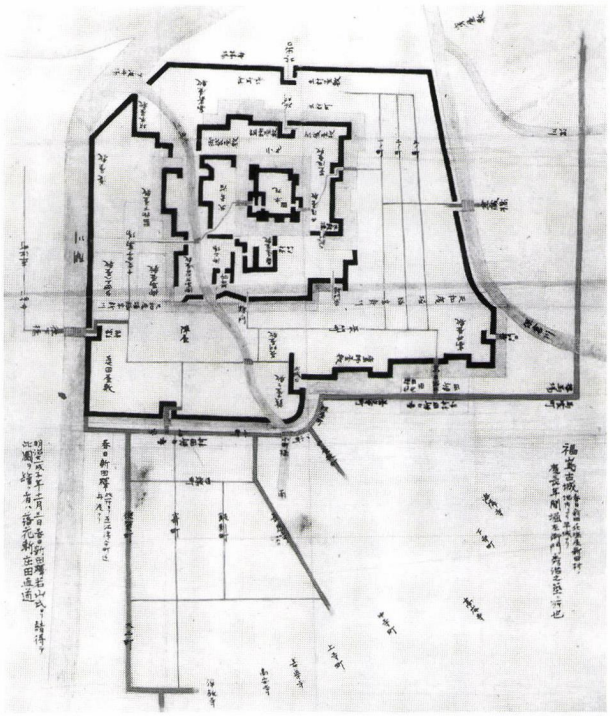
さて、福島城へ話題を移そう。

福島城は、慶長一二年（一六〇七）に完成した越後で初めての平城である。なぜ、越後が全国に誇る山城の春日山城を廃して福島城へ移ったのか、明確な答えは出されていない。これまでは、秀吉が全国統一を成し遂げたのち、山城停止令を出して全国の山城を廃止させて平城に住まわせたとされてきた。しかし、中世史の藤木久志先生によれば古文書では山城停止令を見出すことはできず、全国の山城が平城に移っていくのを文書から立証するのは難しいと聞いたことがあった。たしかに、年表をひもといても秀吉による海賊停止令は見いだせるが山城停止令は記載がない。

ところが、中澤肇先生の『越後福島城史話』に山城の春日山城を廃止して福島城を築城した、という記述のある文書が掲載されていることがわかった。藤木先生にお伝えしたところ、非常に珍しいものであることが判明した。ただ、堀氏から発給された文書ではなく、寺院の由緒に係わるものであるので、その旨お断りしておきたい。

その文書にはこのようにある。『本誓寺由緒鑑』という文書で「堀久太郎秀治領主の時分、山城廃止に相成候由、（中略）然る所慶長五子年（略）」とあり、この文書

福島城古図



明治21（1888）年、旧高田藩士庄田直道が、福島城下に残る古図を写し取ったもので、福島城古図のなかでは最も古いものの一つとされている。（「訂正 越後頸城郡誌稿 付図」）より

は慶長五年に堀氏が新城を計画し、その土地にあった本誓寺に移転を求めたというものであった。中澤先生も前掲書で述べておられるように、この文書に異論があるのも事実でそのまま信じてよいかは別として、慶長五年という時代性が反映されているのは事実である。

なぜ、福島城は関川の対岸なのか？

一言で言えば、国府を移動することが目的であった、ということになろう。もう一度「御館の乱」を思い返していただきたい。景勝の「春日山城」と景虎の「御館」は、謙信によって造られ越後国府の権威の象徴だったと考えられる。そして、景勝は景虎を破って越後の国主となったのである。その二つの象徴はあくまでも上杉氏のものであり、景勝の転封後に越後太守となった堀氏としては、古い権威の象徴から堀氏独自の権威をつくるべく、福島城の築城を計画したとしても何ら不思議はないのである。

ところで、福島城に堀氏が移っても越後守護所は移動しなかったという考えもある。しかし、これでは前に述べたように上杉氏の権威を否定することができない。筆者は、府中の機能をすべて移動して、上杉氏の権威を否定することそのものが福島城築城の本質であったと考えたい。

福島城地の履歴

福島城は、本丸のあった古城小学校のグラウンドで、現在の海抜が三・七メートルであってけっして高い土地ではない。関川左岸では、守護所があったと考えられている徳泉寺境内の三・九メートルとほぼ同じである。港町の皆さんが津波の避難訓練をされたことがあった。この時の避難場所は、古城小学校の屋上であったと聞いたことがある。とても三・七メートルでは津波の避難場所としては低すぎるため、一〇メートルを確保できる三階建の校舎の屋上を避難場所として選んだのであろう。では、人々は古城の土地をいつ頃から利用していたのであろうか。学校の屋上を避難場所にするほど、現代の人々も低い土地と認識している場所を、堀氏はなぜ築城地として選択したのだろうか。

昭和の終わりから平成の初めにかけて、何度か福島城の発掘調査が行われた。当時の日本ステンレスの工場の増築や新築に係わるもので、調査で出土した遺物はほとんどが瓦であった。その中に極めて希ではあったが、平安時代の陶器が出土して不思議に思ったことがある。「何で平安時代のものが出土するのだろう？」正直言って戸

惑った思い出がある。上流の遺跡から流れ出て、たまたま福島城の辺りで埋もれていたものが築城の土木工事で掘り上げられたのかとも思ったが、陶器に磨滅の痕跡が無くどうもそうではないらしい。いろいろ考えたが、結論的には関川と保倉川・櫛池川などによってもたらされた土砂によって形成された自然堤防があって、そこで平安時代の人々の生活が営まれたことがあったのだろうと推測するに至った。（櫛池川も人工的に流路が変更されていて、古くは現在の戸野目川が櫛池川の流路であったと推測できる。）

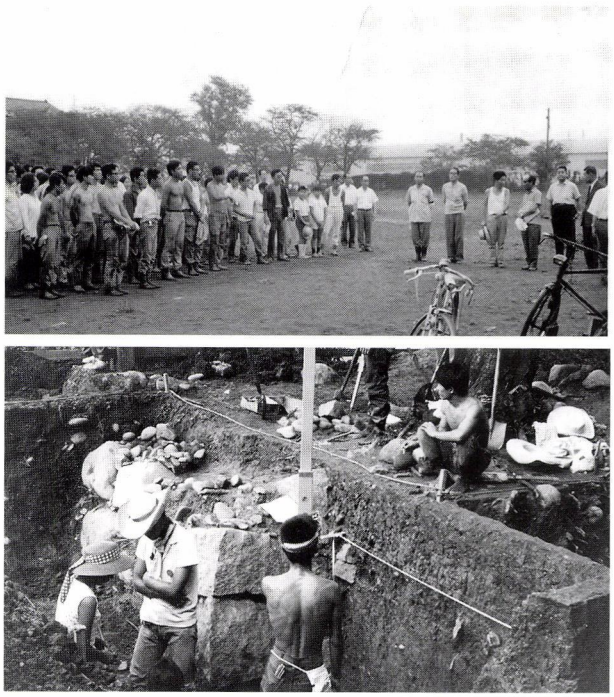
我々が考えるより高い土地と認識されていたのかもしれない。

福島城の発掘調査

福島城は、直江津市当時に発掘調査が三年間も行われた。昭和四二年から四四年にかけてであり、当時では極めて珍しい文化財事業である。直江津市は、福島城の前にも「御館」の発掘調査も手掛けていて、行政が発掘調査を手掛けた県内でも稀な例として特筆される。

同じ頃、当時の青海町が寺地遺跡の発掘調査を実施した例があるが、行政（特に市町村）が遺跡（法律では埋蔵文化財）の発掘調査を担うようになるのは、文化財保護法という法律が改正で整備される昭和五〇年以降であって、直江津市や青海町は先駆的に事業を展開したことになる。ところで、福島城の調査が行われていた時、高田市が福島城の調査を指導していた奥田直榮（なおしげ）先生を招いて、向橋の奈良時代の瓦の窯跡を調査した例があったことも忘れてはならない。頸城という土地柄が、文化財行政を推進する基層にあったのかもしれない。

福島城の発掘調査時の写真が残されている。故佐藤策次市長を中心にいずれも故人となられたが、渡辺・青山・中澤先生や古川渉さんのお顔も見える。ご存命なのは秦先生くらいかと思う。発掘調査に参加したのは学習院大学をはじめとして、国学院大学・新潟大学・山形大学などの大学、地元の高校生、そして中学生も参加していたようである。筆者は糸魚川高校であったので、福島城の発掘調査には参加せず、寺地遺跡で汗を流していた。当時の発掘調査はほとんどが手弁当で、高校生などはクラブの合宿を兼ねていて楽しかったものでる。福島城に参加した高校生たちは、恐らく植木先生や花ケ前先生が引率してこられたクラブの生徒であったのだろう。



福島城の発掘

上　発掘前の朝礼　奥田直栄・中村辛一・古川渉・佐藤策次など各氏の姿が見える
下　大手門の発掘　女子学生の姿も見える

福島城の石垣

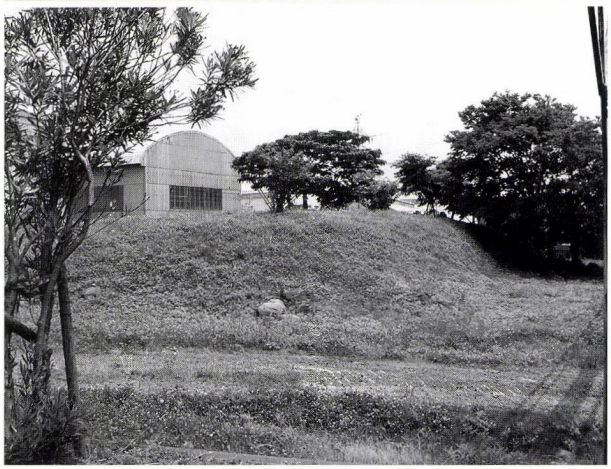
福島城を語る時、「腰巻石垣」という名称が使用されることがある。何とも面白い表現で、どうしてだろう？と以前から不思議に思っていた。これは、発掘調査で確認された石垣が全て現在の地表面より下にあり、本丸を「腰巻」のように廻っていたからだという。そんな石垣なんてあるのだろうか？　筆者は以前から疑問に思っていた。これを解決してくれたのは、平成元年に行った日本ステンレスの工場増築の発掘調査であった。

一枚の写真がある。左端が植木先生で、発足時から精力的に文化財を巡っていた「春秋会」が、埋め戻しを控えた調査現場を訪問された時のものである。ここでは人物ではなく、先生の左側に高く積み上げられた石を見てほしい。土塁の上部まで達しようかという所まで積まれた石に注目してほしい。隅石の大きさも感動ものだ。

福島城の石垣は、「腰巻」などというものではない。いわゆる、「高石垣」そのものなのである。なぜ、「腰巻石垣」などといわれるようになったのかは、中澤先生の前掲書に詳しい。簡潔に言えば、石の無い直江津で大土木工事を行う際に必要となった石材を、福島城の石垣に求めたのだ。日本ステンレスのような巨大な圧延機を必要とする工場が直江津にできたのも、福島城の石垣があったからに他ならない。実物を見た訳ではないが、三〇〇〇トンの圧延機があったという事を聞いたことがある。三〇〇〇トンの圧延機など筆者には想像もつかないが、どんなものだったのだろう。

写真の石垣は保存されている。石垣を露出して保存すると崩壊する恐れがあったので、危険を回避して後世に伝えるため、土をかぶせている。残念だが、歴史の証







上　平成１年の東南隅櫓の発掘（小林規彦さん提供）
中　埋め戻されて保存されている
下　古城小校庭に野面積みで石垣を再現して「福島城址」の碑が建てられている

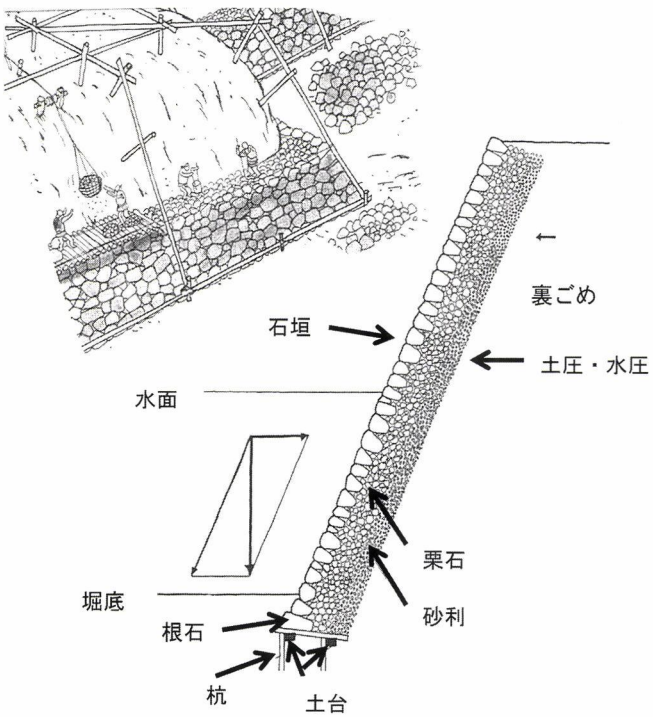
人としていつでも再現できるように残していただいた。お名前は出さないが、当時の日本ステンレスの担当者の方々に対する感謝の気持ちは忘れたことがない。今でも、新日鉄住金の南門を入ったすぐ左にある土の山は、その石垣が積まれた福島城本丸の南東の隅櫓の跡である。

低地に石垣を積むには、土台が不安定な場合が多い。これを解消する方法として、堀の中にクリ材やマツ材を使って土台を作る例が知られている。まず、杭を打ち込む。それを横につなぎ、横材の上に土塁と直角に木を渡して結びつける。その上に基礎となる大きな石を並べて、しだいに高く積み上げる方法である。この方法の積み方は、松本城の石垣の調査で確認されたという情報を以前にお聞きしたことがある。

写真の石垣は「野面積み」という積み方であるが、福島城では大手の、言い換えれば城で最も見栄えが必要な場所の石垣は、「算木積み」という方法で積まれ、長方形の切り石を交互に約半分づつ組み合わせていくものであったとされている（二一ページ）。中澤先生が調査を見守られている写真が残されている。

ただ、保存されている石垣の基礎は木組みではなく、土塁の基部を犬走りのように堀側に迫り出してステップを作り、そこに最も大きな石を置きながら積み上げていったことがわかっている。大手の枡形は、木組みであったかもしれないが今それを知るすべがない。

土塁は、会社にお願いすれば見学も可能であるので、興味をお持ちになられた方は是非この写真を持って土塁の現在の姿を見てほしい。ただし、石垣は土に覆われているので現物を見られないことだけは承知願いたい。



石垣の積み方（『大阪城』草思社刊より）

「府門口」の意味は

福島城に「府門口」なる名称が残されている。奥州街道から城に入る場所に付けられた名称である。これは、明らかに府中を移したことを示すために命名されたものであり、福島城が関川の西岸にあった春日山城と府中の集合体としての越後国府を、東岸の新天地に移したことを意味するものであろう。越後の国の国都を移す、遷都を意味するものとしてとらえたい。このことは、単に山城の春日山城を平城の福島城に替えたのではない。国府の移動を意味するものだったと理解したい。

長く文化財の仕事に携らせていただいたので、さまざまな文化財を拝見させていただいた。その中で、福島城が国都の移動であったことを示す古文書に巡り合ったことがあった。それは、松平忠輝の家老大久保長安の名のあるもので、「府中」と明記されていた。福島城の時代

に発給された文書であり、すでに堀氏が改易となってはいたが、忠輝入城後も福島城は府中と認識されていたことがうかがえるのである。

「高田開府」四〇〇年

今から四〇〇年前、慶長一九年（一六一四）松平忠輝は居城福島城を廃して高田城を築いた。

築城が極めて短期間であることからすると、慶長一九年当時は完成していたとは考えにくい。築城そのものは前年から始まっていたといわれるが、従前から多くの著作があるように堀の掘削や城の造成は一九年に行われたのであろう。城地の選定については中西聰氏の詳細な論考があるので、ここでは割愛する。また、石垣が無い城としても特異である。石垣は、城にあるものと考えがちだが、石の無い地域で石垣を築けば石の確保に苦労する。豊臣秀吉が大阪城で石垣を積めたのは、石の産地の瀬戸内が近かったからである。福島城の石は、矢代川、名立川を主に、西頸城の河川から運んだようである。なお、二一ページの写真にある花崗岩の切り石は、なんと親不知から運んだものであることがわかっている。

高田城は、昭和五〇年代後半から附属中学校の増改築や、高田図書館の建設に伴って発掘調査が行われてきた。昨年から今年に掛けては、開府四〇〇年記念事業の一環で大手枡形の本所御門の発掘調査も実施されている。これまでの調査でわかってきたことを、ここで簡単に記しておこう。

高田城の調査で確認されている御殿の多くは、松平光長が藩主だった時代のもので、それも寛文五年（一六六五）以降と考えられるものが大半である。本丸の附属中学校の増築で調査された奥向きの台所とそれに伴う部屋の基礎が見つかった時は、その規則正しい普請に感激したことを覚えている。さらに、現在の高田図書館の建設では礎石が整然と並び、絵図にある初代高松宮の二之宮御殿であることが判明し、江戸時代の城郭の発掘がこれほど楽しいものかと思った記憶がある。ところで、これらの建物の跡は、実は今でも地中にそのまま眠っているのだ。上越教育大学は増築する校舎の基礎構造を変更して地下遺構を保存する方法を考えていただいた。高田図書館は位置を少し南に変更し、地下書庫で二之宮御殿が壊れないように配慮している。高田城の遺構は、後世に伝えるために発掘調査の時のまま、地下に埋め戻されている。

「開府」の基層

高田城築城は、単に福島から城が移ってきたわけではない。前述のように、福島城が国府の移動を意図していたことを指摘したように、高田築城も国府の移動であったのだ。春日山城と府中から福島城へ、そして福島城から高田城への権力の移動は、越後国都の移動であり、藩主の居城が引っ越したような簡単な問題ではなかった。したがって、そこには前権力の否定という論理が働いていたであろうことは言を待たず、福島も春日山も府中の御館も守護所も長く地中に眠ることになるのだ。

「高田開府四〇〇年」の意味を考えてきたが、それは、それ以前の歴史の動静から意味を見いだせるものと思ってきた。高田城や城下のことに紙面を割かなかったのはそのためである。筆者は、昭和五二年以来携わってきた上越市内の発掘調査の所見から、頸城郡のすごさを実感

してここに述べたつもりである。高田城や城下のことは諸先輩の論考があり、筆者も以前明らかにしたものもある。特に城下町の面白さはことあるごとにお話しさせていただいたり、文章としてもいくつか残してきた。ここでは、それらをおさらいするのではなく、「開府」の意味を権力の移動で捉えたつもりである。高田城と城下町については、既刊の書物をひもといていただくことをお願いしたい。

結びにかえて

「文化力」という言葉を聞くようになって久しい。が、時折「文化力」って何だろうと考えることがある。

ここで書いてきたことは、昭和六三年一月一六日の国分寺の火災がきっかけであったことは否めない。あの晩を境に、筆者の文化財に関する考え方も大きく変化した。不幸なきっかけであったにせよ、上越教育大学の加藤章先生や川村知行先生とお会いすることになり、国府という課題にさまざまな視点からアプローチできるようになった。いろんな出会いは上越市教育委員会の中西聰氏に尽きる。中西さんと机を並べた二〇年の毎日の議論は、楽しくて、というか中西さんには迷惑だったかもしれないが、私にとって素晴らしい出会いである。中西さんがある時講演でこう話された。正確な言葉ではないだろうが、「みなさん、無い物ねだりはできません。自分の周りのものを大切にすること、それが自身の歴史を大切にすることになるのです」のような意味だったと記憶している。「自分達のまわりにあるものをまず大切にしよう」ということだと思う。

「文化力」とは、自分たちが生きてきた過程そのものであろうし、地域の歴史そのものである。浜には浜の暮らしが、平野には平野の文化が、山間部にはそこにしかない産業がある。これらを大切にすることが、すなわち「文化力」なのだろう考えている。

「高田開府四〇〇年」の節目の年に、開府の意味を再考することができた。「開府」は一三〇〇年以上の前に頸城に置かれたであろう「越後国府」に端を発して今に至っているのである。是非、この機会に越後国を再確認することを願いたい。


広報なおえつ　(第三種郵便物認可)　(2)

貴重な成果をあげて

福島城跡　緊急発掘調査終る

「これはすばらしい。新潟県に日本的な文化財が一つ増えました。ありがとう」。澁山太一さん（県文化財審議委員）の発掘現場での言葉です。昭和24年に始った三年がかりの福島城発掘調査は八月七日に終了しました。数すくない統山時代の代表的な城、貴重な城郭跡として脚光をあびています。発掘現場の一部は二〇日まで市民に公開されましたが、市内外より約三〇〇〇名の見学者がありました。

今後福島城跡をどのように保存していったらよいか、市民全体で考えていきたいものです。

❶なぜ発掘をしたのか

新潟県の歴史の中で最も重要な位置をしめるのは、越後国府文化（国分寺もよい）と上杉、堀氏の城郭です。

しかも、鉾台はいずれも直江津だったのです。

しかし多くの史料や出版物には「御館」、福島城はすでに破壊されて、後かたもなく」と記載され、史跡の印さえないのです。残念なことでした。

直江津市では、郷土の文化遺産の解明と保存対策を積極的にすすめるために、昭和39年に御館跡の発掘調査をつづいて福島城跡の発掘調査を取り上げたのです

❷福島城の生いたち

福島城を築いたのは豊臣秀吉の重臣堀秀治です（秀治は城の完成直前に死んだので初代城主は子の忠俊）

上杉謙信の死後、景勝が会津へ移され、堀秀治は豊臣秀吉の命で越後四五万石の領主となり、慶長三年春日山城へ入城しました。

間もなく交通の要地である福島に目をつけ、築城を

揺手門跡の発掘風景
掘撰の大きさは安土城をしのぐといわれる

発掘の成果を報じる「広報なおえつ」
現地説明会に「市内外から3000人も訪れた」とある



八坂神社

歴史は「今日」への手紙

残しておくべきもの
伝えておくべきもの

八坂神社を巡る

直江津っ子の血をわかせる祇園祭。その祭神である牛頭天王は神仏習合の神であり、明治になるまで、八坂神社は「祇園感神院」または「祇園社」と呼ばれ、直江津では「今町祇園社」と呼ばれていた。

祇園社は牛頭天王・八人の王子・天王の妃が祀られているため、八王子（神）社とも呼ばれ、町の人の間で「はっちょうじ」と呼びならわされているのは、それが訛ったものである。祇園の神輿を「お天王さん」と呼ぶのも牛頭天王をご神体として乗せているからである。

今町祇園社には神仏習合の寺（別当寺）があり、「曼荼羅寺」と呼ばれていた。そのことは、明応四（一四九五）年に越後守護代長尾能景が発した文書からもわかる。

曼荼羅寺については、大正一三年、直江津駅前通りのフデヤ理容店の前にある防火用水設置工事中に、五輪塔や石仏が次々と出土し、これを見た地域の人たちは、このあたりの字名である曼荼羅寺の遺物であると推定し、泉蔵院の本堂前に祠を建てて出土品を祀った。

余談になるが、昭和三年、ご即位の大典を記念して（と思われる）、字名でしか分からない寺の遺物らしき物を保存し顕彰しようとする、このまちの―研究者でもない―市井の人たちの「地域力」には驚くとともに、後の人間としては、まことにありがたい。

その碑には左のように記されている。（原文の旧漢字を新漢字に、カタカナをひらがなに改め、適宜句読点を入れてある）

そもそも、曼荼羅寺地蔵尊は古来、当砂山字曼荼寺に有りしも、余の変遷と共に廃去し其の跡また判然とせざりき。然るに、大正十三年九月、今の曙区貯水池設置の際、計らずも御尊像の出現を見、よってこの地を曼荼羅寺跡と定むるを得たり。ここに今を

去ること六百余年の間、言伝(いいつた)う同寺の遺物御尊像を永く守護せんとして、時の世話人、発掘者合議(あいはか)り、さらに泉蔵院主の厚志を得て、ここに安置し奉り、そのため記念碑を建てる。

昭和三年三月

碑裏

区長　山崎寅治

世話人　イロハ順

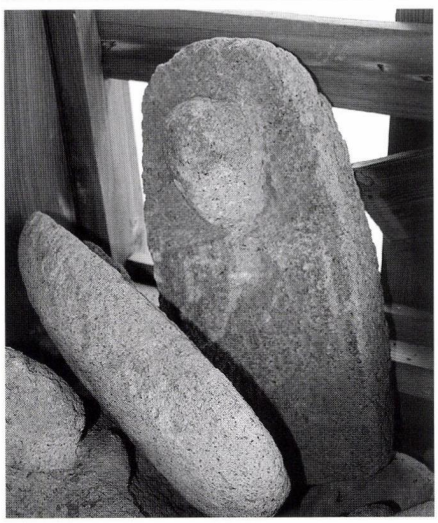
伊藤八三郎　山崎市太郎　時田徳次郎　小林林蔵

笠原正二郎　小池三治郎　田中秀作　小林勝太郎

滝田太郎作　水島才二郎　田中福松







泉蔵院本堂前

右上　曼荼羅寺跡出土の石造物を安置するお堂

左上　由来を記した碑

左下　出土した石仏

今に至る祇園社は上杉景勝の會津移封後、廃絶の危機にあったものを砂山村の産土(うぶすな)神日吉社の岩片氏が再興したと伝えられている。元禄二年、祇園社・諏訪神社・日吉神社を一殿に合し、三柱神社あるいは諏訪神社と呼ばれていた。ちなみに、諏訪神社は直江津の産土神で、南小学校のある諏訪ノ森にあった。

明治一（一八六八）年、明治政府によって出された神仏分離令（正式には神仏判然令）によって、本家京都の祇園社は、祇園精舎の守護神（仏教系）である牛頭天王と同一視（習合）されている素戔嗚(すさのおのみこと)に祭神の名称を変え、社名も八坂神社と改めた。直江津の八坂神社は、昭和三年に正式に八坂神社と改称している。

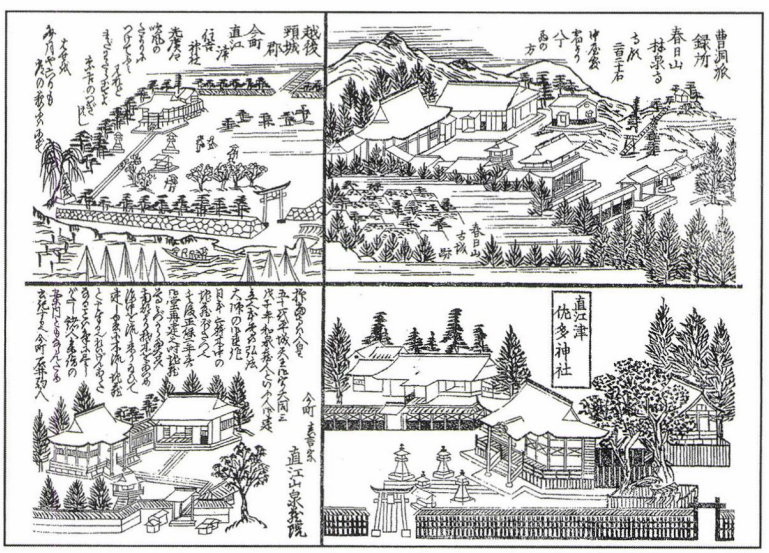
興味を引くのは、安政二年に刊行された「東講商人鑑(あずまこうあきんどかがみ)」に、社殿の絵図とともに式内社である「佐多神社」と書



諏訪神社の紋「梶の葉」が施された向拝の鬼瓦



出土品には五輪塔や宝塔と思われるものがある



安政２年に出版された「東講商人鑑」の挿画

八坂神社は「佐多神社」と記され、左の絵は泉蔵院である
図版の解説は直江津今町の石井駒人(いしいこまんど)という狂歌師である

かれている。この絵図には神社の北側に鳥居があり、そこが正面であったことが分かる。

社殿は、直江津のまち内に残る江戸時代の数少ない建物の一つであり、本殿は享保六(一七二一)年に造営され、施主に大願主水嶋善兵衛、大庄屋福永彦左衛門、小杉津右衛門など、直江津今町の町衆の名前が連ねられている。

拝殿は天保二(一八三一)年九月に釿始(ちょうなはじめ)、同八年に竣工している。郷土史家の故渡辺慶一氏によると、用材は青森から船によって運ばれ、大工棟梁は増五郎、作兵衛の二人であったという。

社殿入り口の唐破風の向拝(ごはい)に上がる鬼瓦には諏訪神社の紋である「梶の葉紋」が施されているので、当初、諏





上　迫力満点の木鼻
下　装飾的な蟇股

訪神社として建てられたものと考えられる。

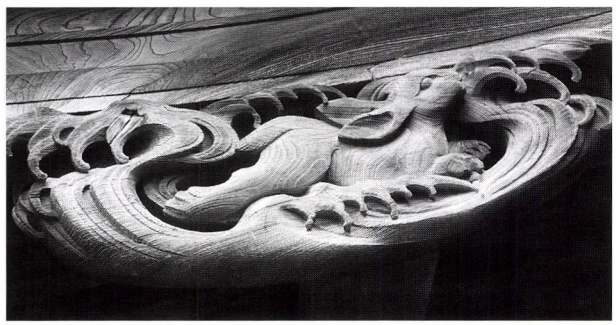
故中村辛一氏は拝殿の鶴亀、鯉の滝登り、鷲、牛飼い、孔雀などの彫刻は寄町（住吉町）の初代高橋冨吉（安政六年没）、二代冨吉（明治一四年没）の父子の作で、拝殿左右の彫刻は初代、向拝と拝殿正面中央は二代目の作と解説している。木鼻や虹梁の彫刻も当然父子の作である。

これらの作品は、上越地方でも屈指の出来栄えとされ、その見事さは目を見張るものがある。

鳥居をくぐった右の秋葉神社は、大正天皇が皇太子時代の明治三五年、行幸された折の休憩所を移築し社殿にしたものである。境内には稲荷社、神明宮、その他歴史を物語る石造品などが数多く目につく。



向拝の上の鶴亀の彫刻



向拝に施された波兎



牛飼い



雉

松尾神社



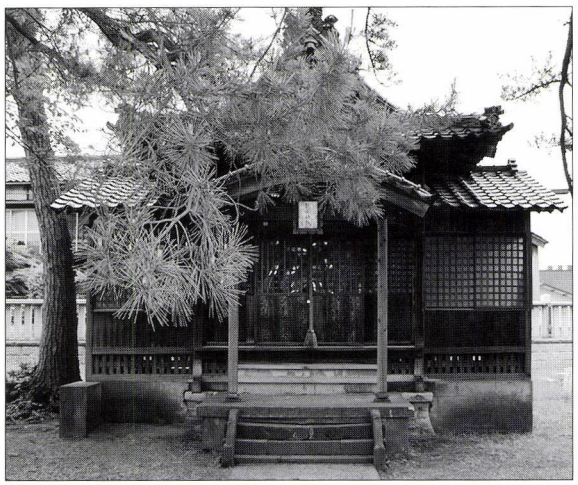
境内の本堂左奥に瓶子を飾った珍しい神社がある。酒造の神様松尾神社である。

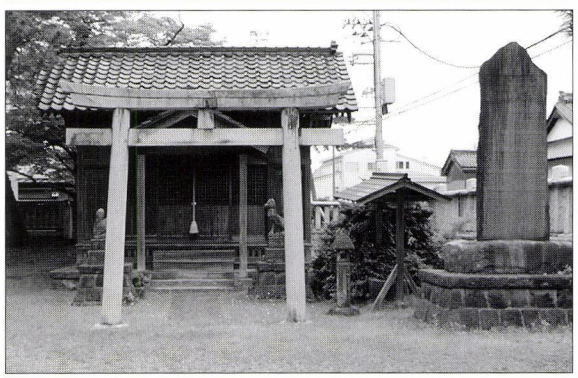
いつ、だれが勧請したか分かっていないが、かつて直江津酒組合で調べたところによると、直江津の大肝煎福永家八代福永彦左衛門が、今から二〇〇年ほど前の天明年間に酒造業を始めているので、福永家がそのころ京都の松尾大社から分祀したのではないかと推定している。

祠の台座は明治四四年五月に直江津酒業組合で修復しているので、右の推定も理解できる。

また、石祠は平成二三年五月、直江津酒商組合で改修を行っている。

なお、単独の酒商組合が松尾神社を護持しているのは県内には例がないということである。







上　秋葉神社
中　稲荷神社
下　神明宮

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

あとがき

「高田開府４００年」を迎える年に、小島先生にお願いし、二回連続での「高田開府４００年の意味」を後世に残せたこと。

そして今、上越沖で注目を集めている「メタンハイドレート」をテーマに濁川先生にお書きいただいたこと。

過去から将来へと歴史のバトンを「直江の津」の中で一緒にお届け出来たことをよろこんでおります。

平成二七年には「北陸新幹線」の開業を迎えます。スピードの音が聞こえてきました。

（梅田）

目　次

人工メタンハイドレート　濁川朋也　4
大火のまち直江津の歴史遺産
【座敷蔵】を考える　9
特集「高田開府４００年」の意味　その2
新潟県文化財調査保護指導員　小島幸雄　15
巻頭エッセイ・このまちのこと　森田君夫　2
歴史は「今日」への手紙
八坂神社を巡る　26

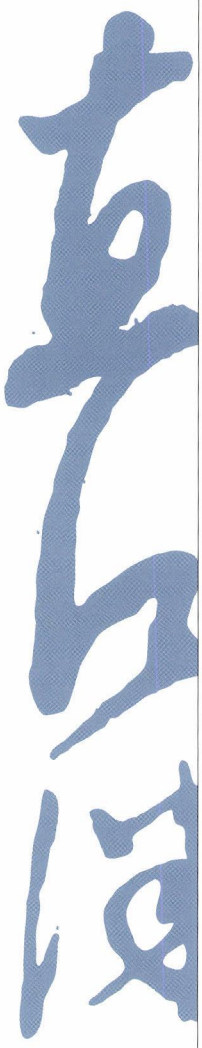
「直江の津」
第一〇巻一号　通巻三四号
発行日／平成二六年七月一日
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／荻野順次郎
問合せ先／上越信栄社
電話〇二五（五四五）〇二〇二
上越市中央二－八－一
制作協力・北越出版

2014・1号

直江の津



発行／平成二十六年七月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／㈲北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／ムロハシデザイン



頒布価格／五〇〇円